

知的障害者施設における介護と看取りの意味

—施設職員の語りから—

張 貞京・石野 美也子

制度的なバックアップのない知的障害者施設において、長期にわたる介護と看取りが行われている例がある。その取り組みを可能にする要因は何か、困難とは何か、長期のプロセスの中で職員が抱く思いは何かについて語りを通して明らかにした。利用者とは職務を超えた関係が形成されており、職員間の協力関係が不可欠であった。そして、介護と看取りを経験していく中で、死が生と断絶したものではなく、生活の延長線上にあるべきこととして認識していくことが分かった。

キーワード：看取り、施設職員、語り、職員集団、関係性

1. はじめに

高齢化が進む知的障害者施設で、利用者の介護と看取りを行っている職員は何を感じ、何について悩むのだろうか。

近年、知的障害者の高齢化は著しく、2000年に旧厚生省が知的障害者の高齢化対応検討会を立ち上げ報告を行っていることから明確である。その中で、高齢知的障害者の地域での暮らしは、様々な整備は必要であるものの、不可能ではないとしている。入所施設の場合は、設備などの改善を課題とあげ、地域の資源を使用するとともに制度的バックアップの必要性を指摘している。しかし、高齢知的障害者がどれくらい地域で暮らし、どのような生活を送っているのかは明らかになっておらず、現状の正確な把握とともに適切な支援策が急がれる。

高齢化の現状が明らかになっている入所施設においては、急速に高齢化が進行しているにもかかわらず、制度的な整備はいまだに実現していない。介護老人福祉施設であれば、「重度化対

応加算」または「看取り介護加算」などが行われる。それに対して、障害者入所施設では介護と看取りが必要となったとき、制度的バックアップを得られないまま、施設職員が看取りを行っている（上平ら、2003）。佐藤（2009）は、アンケート調査項目について終末期ケアを行っていないと回答した施設について、個別確認を行ったところ、ケアの意識なく看取りを行っていたことを明らかにしている。一部の報告ではあるが、入所期間が長期化している施設では、家族の高齢化も伴い、必要に応じて介護と看取りを行っていると推測される。必要に応じてとはいうものの、施設職員がどのように介護と看取りに取り組んでいるかは明らかでない。

特別養護老人ホームは入所の時点において、家族の介護力がなく、「終の棲家」といった意識が強い。老人施設の職員を対象に看取り意識とその関連要因を調査した清水ら（2007）の研究では、調査対象の50%以上が施設での看取りを積極的に行いたいと回答している。具体的に、自由記載の例をあげ、長期間ケアをしてきた関係性から看取りをしたいと希望している職員の思

いを明らかにしている。これは、介護保険改定直前の時期に行われた研究であり、重度化や看取り加算がない状態での職員の意識を調べている。そのため、それらの制度が整備されていない障害者施設の職員が置かれた現況に類似点が多い。研究結果では、積極的な看取り意識と関連する要因として、年齢の高さ、施設での看取り経験人数の多さ、職務経験年数の長さが関係するとしている。職員が看取りの経験を積むことで、自信が生まれ、積極的な態度を取るようになったと考察している。課題として、実際の介護と看取りを行う介護職に対する支援体制の整備をあげている。その理由は、職員の入所者本人への直接的な感情労働とともに、家族に対する感情労働を強いられているとしている。具体的な支援体制として、職場内で励ましあい、思いを出し合える心理的支援体制の整備をあげている一方で、対象者の7割を超える職員が終末期ケアに関する相談がしづらいと回答していることも特記すべき事項である。

筆者（2011）は介護と看取りを多数経験している知的障害者施設職員へのアンケート調査で、介護や看取りを行う職員の思いと制度上の課題を明らかにした。対象者の7割が長年暮らしてきた施設で看取られるべきだと回答しており、本人や家族の思いに応じていきたいと示している。これは、三原ら（2009）が行った施設職員の職業意識に関する調査の中で、給与や忙しさなどへの不満を持ちながらも、「利用者との触れ合い」を仕事に満足する理由として挙げる人が最も多かったことにつながる。たとえ、老い、死にゆく場面にあったとしても、利用者との触れ合いの中で得る関係性と手応えが、制度的な不備に縛られることなく、職員を行動させるのではないだろうか。

しかし、介護の始まりやプロセス、その最後

にある看取りを通して職員が何を感じ、何を悩んでいるのかは明らかにされてこなかった。先述の清水ら（2007）は、終末期ケアに対する職場内での相談がしづらいつと感じている職員が多いことを取り上げている。老人施設と知的障害者施設の違いはあるが、複数の職員が職務年数や経験の相違を抱えて取り組む職場であることは共通する。介護と看取りのプロセスにおいて、職員同士の関係にみられる困難は明らかでない。

また、老人施設と異なり、様々な年代の健康な利用者が周りにいるために起こりうる事態や課題についても明らかにされていない。ほとんどの研究がアンケート調査の方法をとり、意識の傾向に集中している。介護と看取りは一日ではなく、中長期にわたり状況が変動し、介護される本人と職員、職員間、家族との関係などが複雑に関わっているため、アンケート調査方法では限界がある。介護と看取りのプロセスの中で感じた困難、葛藤、課題は、一人ひとりが自分の記憶にある体験と向き合い語る時間を持つことで明らかになる。また、語るプロセスは、本人が自分の行動を客観視することで、人生または仕事上の新たな課題を見つけ出すプロセスでもある。

本研究では、第一に、介護と看取りのプロセスにおいて職員が抱える困難と心理的变化を明らかにし、制度的改善点を探る。第二に、看取りプロセスと関わる健康な利用者にもみられた困難と課題を探る。第三に、介護と看取りが職員に与える心理的限界および手応えの内容を具体的に示す。なお、介護と看取りの経験については、突然死のような予期せぬ事態を取り除き、長期介護を必要とする生活の延長線上にある介護と看取りのケースに限定する。

2. 研究対象および方法

(1) インタビュー対象

インタビュー対象者は、筆者（2011）が知的障害者の死別体験と関わる施設職員の意識を調査した施設に在職して20年のBさんである。Bさんの語りを聞き取った理由は、突然死ではない複数名の介護と看取りを長期に渡り経験しているためである。

Bさんは、老衰による1名の知的障害者を介護し看取り、アルツハイマー型認知症を発症したダウン症者4名を介護し、そのうち3名を看取っている。発症時期と進行速度の個人差はあるが、2001年ころに介護が始まっており、インタビュー実施時期の2011年までに、約10年間の介護と看取りを経験している。

(2) インタビュー方法

質問方法については、やまだ（2006）を参考に限定的にならないように行った。就職したころから時系列で進め、語りの流れに沿うよう、①利用者の介護が始まった際の心境や出来事、継続できた理由、②看取った際の心境や印象的なエピソード、③施設における看取りの考えについて質問を挟み、非構造化インタビューを実施した。インタビューは2011年6月に実施し、静

かでリラックスした環境の中で答えられるよう配慮した。

(3) 分析方法

対象者の許可を得て、ICレコーダーにインタビュー内容を録音した。対象者およびインタビュー内容に登場する個人の人名と守秘義務に関して十分に配慮し、人名は個人が特定されないようアルファベットを使用し仮名表記した。個人が特定される可能性のある内容は、語りに影響しない範囲で改変し記載した。本文の中に示す語りは、やまだ他（2007）のテキスト作成法を参考に、加工した。

インタビューの時系列に沿って、まとまりのある語りを区切り、それぞれに通し番号をつけた。内容分析に際しては、関連する語りをまとめ、研究目的の項目に合わせて考察を行った。

3. 結果と考察

(1) 利用者の変化と介護の始まり

ここでは、利用者の変化に気づき、戸惑う姿と、それらを乗り越え、対応法を切り換えていく姿が語られた（語り1）。

本研究はBさんの語りを分析するが、「自分ら」といった表現が多数あり、語りの中には複数の職員を代弁するような内容が多くみられて

語り1：利用者の変化に戸惑う

ある日に突然、パンツを頭にかぶっていたりとか。あの袖を（間違った方から）こう通していたりするときに、はてなと思うわけや。（職員が）「あれっ」ってなって、ほんで何かそのときに、「ちゃうやん」って言うやんか。でも、本人は分からへんくって。でも、「ちゃうやん」て言い続けるやん。（本人が）「分からへん」てなって。その「ちゃうやん」と言って、なんで何か通じひんくなくていくつていうのが。すごい自分らでも分からへんかった。「何、何が起こってんの。何してんの」みたいな感じで。ほんで、最初はそんなやんかった。そこで、あの、こうやってんなって。自分ら切り替えてやっていかなあかんとは思わへんくって。もう腕がせて、「ここちゃうやろ。ここやろ」と言って。ほんで、ちゃんと聞いていると思ったら、またちゃうところやって。そのうちに、あの、本人たちもどンドン分からへんくなくてきて、笑わへんようになってきたんかな。最初は、「あれ、へへ」と言うたはったんやけど、「分からへんもん」みたいなことを連発しはるようになってから、これはまずいと思って、あ、そうかって、となって。

語り2：自分のやり方について①

あれは自分がまずいし。あそこで、あんなこと言ったらもう、もうあかんよというのは、何ていうの、経験してきたことで分かるから。何かどっちも追いつまされていくのは分かるやんか。そういうのが分かってきたから、今ここで、ガミガミ言っても、自分が言いたいから言っているだけで、相手にとっちゃ何にもならへんみたいなのは分かっていたかとは思いたい。

語り 3：自分のやり方について②

切り替えはやっぱり若いから遅いて言うたら変やけど、経験もないから遅いねんけど、そこで何かやっている人たちがいて、そのとき自分らは何かしなあかんって言うのは。何か、だいぶすると何かしなあかんという感覚もなくなるのかな。何ていうのか。あ、出来ないからやる、みたいなところは何か、うん。年々、そんなに考えなくなったの。何か、いいのか悪いのか、よく分からへんけど、うん、もうそれは当たり前かな、みたいな。当たり前。

語り 4：他の場所に変わることは考えられていなかった

何かね、どこか他のとこにやるという発想が、まず無くて。えっ、こんな状態で、どこ行くのって。ほんで、何かやってて分からへんやん、自分らも。自分らも模索している間に、まあ自分らの感覚からしたら、(病院や高齢者施設への転院は) 途中でもう逃げるとか、放り出すとかいう感じで、それは何か。いや、私、そんな事のためにやってきたんかな、情けないわと思ったし。あと、やっぱりすごいわ大変になってきたりとか。あと、胃ろうになったらなったで、まあそれもそれで大変やったんやけど、

いる。他の職員と共通認識を持ち取り組んでいたためであり、Bさんが共同かつ信頼関係にあった職員と互いに思いを話し合っていたことを物語る。

様々な疾患による違いはあるが、アルツハイマー認知症の発症による変化は、生活を支援していく職員にとって大きな戸惑いをもたらしていた。理解できず、最初は「自分ら切り替えてやっていかなあかんとは思わへんくて」と、利用者が以前の出来ていた姿に戻ることを求めていると語っている。次第に、利用者の笑顔が消えていくことに気づき、「これはまずい」と、職員のやり方を変える必要性に気づいていくことが分かる。

語り 2、3では、すぐに切り替えられず、利用者を追い詰めたのではないかとといった反省の言葉がみられる。経験を積み重ねていくことで、出来ないことを問題視するのではなく、自然な事として職員の考え方や対応の仕方を変えていく変化が語られている。自分の思いを優先させるのではなく、相手の現状に即した相手を主体とした対応法である。

そのような姿勢は、生活の基本が出来なくなる利用者に対して、どこか違う場所に移すよう

な発想はなく、現状に对应していきたい強い思いと行動としても表れている(語り 4)。語り 1～4までにみられる、利用者の変化への戸惑いと、利用者を違う場所に移す発想がなかったことは、長期に渡り関わってきたことで職務範囲や関係を超えた人と人の結びつきが形成されていることを伺わせる。しかし、複数の利用者が暮らし、複数の職員が関わる場所である施設において、一職員の思いで介護が決定されるのではない。次に、長期の介護と看取りを可能にした要因とは何か、語りをみていこう。

(2) 介護を続けられる要因

ここでは、一緒に取り組んでいた職員の共通する利用者への思いと支え合いが介護と看取りを続けられた要因であると挙げている(語り 5)。

自分が精神的に落ち込んだとしても、他の職員がそれを補っていく協力関係があり、互いに信頼関係があったから介護を続けられたと語る。この姿は、前項から続く「自分ら」といった表現からも読み取ることができる。

その一方で、語り 6では職員間で起こった困難として、利用者への直接的な介護を行っていない職員が示す意見の相違をあげている。目の

語り 5：同じ思いを持ち、支え合える複数の職員がいたから出来た

一緒にやっていたメンバーが、それぞれがきちっと見ていきたいという思い持ってたから、自分も結構何か(精神的に)落ちていくやけど、でも、周りがそのとき、別に一緒に落ちるわけじゃなくて、何かうまい具合に、菌車が噛み合って。何か、でも、みんなやっていこうと思っていたから、やれていたから。そこの信頼は絶対あったから、やれていけたんじゃないかなと思って。だから、あそこが、そのチームとして、まず成り立っていなかったら、うん、その4人の人のことも見ていってなかったかも知れんし、自分も、もう辞めていたかもしれんあと思うから。

語り6：介護の大変さより、周囲の言葉で苦しめられる

やっぱり大変、4人、介護していたときは、やっぱりもうしんどかったし。あの時って、他の人からも、「なんで、そんなん見なあかんのや。他の人、見れへんのに」で。「見ん方がよかったんちゃうか」と。「見ん方が」というか、「どうにかしなあかんのちゃうか」と言われたときは、やっぱり何か、何やろう、自分らだけが、頑張っていることというのが、周りから見るとは、何か、何やろう。頑張っているけど無理したはるんじゃないかと、全体のこと見れてないんじゃないかと思われているときは、やっぱり、精神的には一番しんどかった。

前にいる利用者の姿に応えていきたい思いに対して、介護をしようとする職員が無理しているのではない、周りの利用者への関わりが疎かになるのではない、と指摘され精神的にしんどかったと語っている。そのような意見は、制度的バックアップのない状態で介護と看取りを頑張ろうとする職員を心配する声であり、複数の利用者の生活を支援する施設内の状況に対する客観的な意見でもある。

もう一つ、介護を続けられた要因として挙げているのが、利用者の家族が抱く施設への思いである（語り7）。介護専門の施設に変わる選択肢の検討を勧められたBさんは、体力的なつらさを感じていた時期でもあり、他の意見に触れることで介護を継続していくことへの迷いが生じていく。自分では決断できず、利用者の家族に、その選択肢について意向を尋ねる。その時、他施設に移してもいいが、「最期はここで見たってくれ」と言われ、自分たちがやろうとしていた介護と看取りの意味に気づく。出来なくなっ

たから介護をし、看取っていくのではなく、この施設で暮らしてきた人であり、友だちもいる、それまでの生の多くがある場所だからこそ介護を続ける。Bさんは家族の思いに触れ、生活を支援してきた職員の責任であり、死に近づいていくことで、それまでの生と切り離されるべきではないと考えられるようになる。

(3) 職員間における伝承の難しさ

他の職員の様々な思いに触れつつも、介護を進めていったBさんであるが、若い職員との考え方のギャップに悩む姿が語られる（語り8,9）。

就職と同時に、看取りが前提となる介護をしていくことは、これから利用者との関係を築く若い職員にとって、その意味を考える機会もなく取り組みが先行することになる。Bさんらは介護と看取りに取り組む際、勤務時間内の仕事では賄えきれず、私的な時間を使っていることが分かる。そのようなBさんたちが示す介護や看取りに対する姿勢を、若い職員が抵抗なく受

語り7：違う選択肢もあるのか？—家族の思いを知り、看取ることの意味を考える

（先輩より他の選択肢を）「一応1回考えてみたら」みたいに言われた時に、まずまずショックやったんやけども、まあ、それは自分らも結構がた来ているし、まあ取りあえず家族の人に1回何か言ってみようと思って、Yさんの家族に言ったときに、すごいショックがらはって。ああ、そういうこと言われなあかんようになったか、みたいに思わはって。「いや、でもな、まあここで見ていけへんというのは、何か、ようよう分かる」で。「職員さんらも一生懸命やってくれたはるし。ただ、周りの人もいるって分かってる」で。で、「じゃあ、もう老人ホームとかあって、あの、うん、ほかにやってもかまへんけど最期はここで見たってくれ」と。その、「葬式したってくれ」って。やっぱり、あの、何やろう。Yさんが、自分の地域で見送られというのは、やっぱり違うと思うと言われて、やっぱりここでずっと生きてきはった。「やっぱり、その仲間には最期は送ってもらって、見送ったってほしいねん」で言わはって、それは結構ね、ここでYさんたちを見ていこうと思った、たぶん初めて。初めてというか、薄ぼんやり、やっぱり、ああ何か見ていきたいなと思ったし、こんなふうに、あの、家族が言ってくれはるというのは、やっぱり何かそこには応えていきたいなって思ったから。そうしたら、最期を看取るだけって何か、それもやっぱりしたいし、そこまでやっぱり自分らが見ていくというのは、なんとなく責任かなというのは思っ。そういう家族の声というのは大きいね。

語り8：介護が進んでいく中で感じる若い職員とのギャップ

自分は、その人ら（若い職員）の気持ちがどうかというのは分からへん。しんどかったと思う。何か特に、今の人（若い職員）って自分の世界ですごく大事やし。何か、仕事は仕事できちんとしたいけど、プライベートな時間はきちんと守りたいというので。あの、まあ、サラリーマンじゃないけど、ほんまきちんと定時に上げれることをずっと言っはったし、あの、劇とかの練習とか準備（勤務時間外）とかも、やっぱり、あの、自分の時間でやるのはおかしいとずっと言っはったから。何か、そこら辺は、ね、あの、そういう考えもやっぱりあるんやなと思うけど。

語り 9：勤務内では務まらない難しさー解決への葛藤

だからって、それを今すぐ実現できるわけじゃないし、ある意味そういう感覚は分かるけど、でも、当たり前みたいに利用者さんには、何ていうの、提供してきたと言ったら上からやけど。ある時間を、いま自分らの時間を守るために、割けないというのはもう出来ないから、そこをこれからどうやっていくのかなというのが、課題かなというのは。当たり前やけど、若い人には、やっぱり気持ちよく働いてほしいし、自分らかつて、もう20年働いてきたから、まあまあ何もなくて働いたとしても20年やん。あと、まあやってきた分しかないわけやん。(…中略) まあ、ドライな考えを持ちつつも、やっぱり仕事としてやっていってもらう人を育てていくって。やっぱり絶対やっていかなあかんことやから。

け入れることは難しい。職務上ではあるが、利用者との関係が深まることで、介護や看取りへの思いも深まっていく。若い職員の思いを理解し、Bさんたちがやってきた私的時間を割くことの矛盾を認め、課題として挙げつつも、現状を守るためには若い職員にどのように伝え、育ってもらえるか悩む姿が語られている。

(4) 介護と看取るプロセスと付き合う利用者

職員間の思いが異なるように、介護される利用者の周りにいる健康な利用者の思いに応えることも介護と看取りを進めていく上で葛藤をもたらし(語り10)。施設職員にとって、介護が必要な人とそうでない人、どちらかが重要で、優先順位をつけられるわけではない。しかし、現状としては、介護に必要な時間が増え、健康な利用者たちは待つ時間が増えることになる。利

用者によっても、思いや表現の仕方は様々である。介護をしている職員の大変さを察して遠慮する利用者、介護と看取りの張りつめたような雰囲気の中で苛立ち爆発的に話す利用者、などの姿に職員は気付き悩んでいることが語られている(語り11)。

そして、遠慮や苛立ちに気づきながらも、すぐに対応できなかった経験を振り返り、どのような状態の利用者であろうと大切に考えて伝えたい、応えたい自分の思いに気づくようになる(語り12)。日々の生活において、もっと早く気づくべきだった、もっとゆっくり聞いてあげるべきだったと振り返りながら、明日を迎えていたことが伺える。どちらの利用者も大切にしたい考えの根底には、死がみんなに共通する事として、共同生活を送るみんなの生活の一部であり、自然に感じてほしい願いが込められている。

語り 10：周囲の利用者が感じること

Rさんのときは、ほら、劇(施設恒例の行事)の前やったやんか。うん、劇の前やったし、みんなも何か、「劇があるし」みたいなんで、「Rちゃん亡くなったし」みたいな感じで。ここの利用者さんってダイレクトに聞かへんとこがあるなって。どっちかと言うと、ね、Nさんみたいに感情が後から出てきたりとか、こう、質問に対して遅いとかっていうのがあるけど、まあまあ多いかなみたいなん思っ。うん。そういうことは、自分たちで遠慮しているのかなと思うところもあるし。何か、そういうことは利用者さんに甘えているところあるかもしれないけど、うん、そこに向かっていく職員の姿というのを、そういうふうに見えてはるかなというのは、その何人か、やっぱり看取っている中で、そう思ったはるし、そこをいま大事にしてはるのかなというのは、彼女たちも感じてはるのかな。

語り 11：周囲の利用者の思いにも応えなければ

ちょっと自分では、いま思っ。遠慮したはるんかもしれんし。もう何か、なんとなくこう張り詰めた状態みたいなんがあると、みんなはもう。何かやっぱりいらいらしはるね。うん、何か一方的に話してきはって。もう話が、こう、何やろう。そこに聞いているという(人)があるといいから。何かでコメントを返してほしいわけじゃなくて。もう爆、爆発的に自分がしゃべりたい。「自分のことを聞いてくれえ」だよ。うん。で、ちょっと自分のこう、意識がびゅんとなっていると、「分かってるか」みたいな感じで。分かってます、みたいなとか。

語り 12：生の延長線として自然に思っ。一どの瞬間も大切

やっぱり自然には思っ。自分らも何かあんまり、そこにきゅっと(緊張した雰囲気)いくんじゃなくて、やっぱり、そこは自分らの経験があるわけやんか。きゅってなってきた、周りがどうやったかとかもあるし。だから、もう自然にはいきたくないなって。みんなの生活の一部で亡くなっていかな。だから、当たり前やけど、みんなの生活もあるし、この人の、あのこともする、みたいなところが、やっぱり同時に思いを馳せたいなって。死んでいく人のことも大事やし。でも、だから生きている、みんなのことも大事に思っているんやで、みたいなんを思っ。態度でそこまで示せるか、いけるかどうか分からん。でも、そこは、やっと思えるようになってきたかな。うん。もう20年で、やっと思えるようになった。

語り 13：看取る瞬間の記憶－覚悟を決めて看取る

どんな最期やったか忘れた。Fさんは、看取ったときにどう思ったんやろう。あんまり何にも覚えてへん。ただ、何かFさんが、もうそんな長くないねって言われて1カ月半ぐらい点滴やったんやけど、もうその点滴入れ始めたぐらいから、もういつ亡くなってもおかしくないというので準備はしてた。うん、気持ち的に。だから、もういつ亡くなっても大丈夫やねというのは。大丈夫やねというのか、覚悟していたというのがあるから、まあ突然死というのとは違うよね。ほんで、うん、まあ大事にしていかなあかんというのと、逆に、いままでやってきたことと何ら、まあ変わりはない感じではやっていこうかなと思って。

語り 14：出来る事があるのに出来ない

Gさん（利用者）の時は病院で亡くならはったから。うん。特に、どうか。あのときは、うん、病院に入ったからって安心できひんねんやなと思ったときに、何だ、自分が見ていることも結構何かいけてるやんと思ったから。ちょっと病院入ったからって安心してた部分があったから。もう何か言ったことを受け入れてもらえへんかって、持続吸入しているとかも。若い看護婦さんとか、先生も若くて、もう何か、ああ、ああ、みたいな感じやって。大丈夫かよ、みたいな感じで。勝手に吸引なんてしたらあかんけど、吸引してくださいと言っても、なかなか来てくれへん。でも、もう詰まってるの分かるから。で、溜めといたら窒息するに決まってるやんか。そう思うて、自分ら毎日さ、（施設内の人には）持続吸入してさ、やってんの、何それと思って。

語り 15：悔いはあっても次に進む様々な看取り方がある

何か結局は、そういうふうなんで亡くなったから、まあ自分の中では悔いがあったけど、もうでも、お姉さんが、Gさんが12月に亡くなった後の4月ぐらいに亡くならはったんかな。やっぱりGさんのことは、そういう亡くなり方やって、Gさんには申し訳なかったし、あれやけど。まあ、Iさんら（先輩）とも言ってたんやけど、まあ、看取って亡くなりたかったんじゃないかというのは言ってはったし、もうそう思おうかと思って。やっぱりその時で出来ひんかったことというのは、やっぱり次に進めるしかないし。やっぱ、そうやな。Tさん看取って、Gさん、Fさんてなって、Rさんてなって、うん。やっぱりそのとき後悔せんようにはしたいなということ、すごく思ったし。

(5) 看取る・死のあり方

長期にわたる介護と看取りを続けてきたBさんであるが、看取った瞬間に関する具体的な記憶は少ないと語る（語り13）。それは交代勤務をする職員であるために、死に目に会えなかったためではない。後悔の無いよう精いっぱい介護をしてきた日々があり、自然な生活の延長線上にある死であったためである。次の語りに登場する利用者の例でも明らかである。

Gさんの場合、病状と家族の意向により医療機関で最期を看取られる（語り14、15）。医学的措置が必要となり入院する医療機関は、多数の

患者がなんらかの措置を待っており、緊急時を除いて一人ひとりの状況に即時対応することが難しい場合もあるだろう。少しでも苦しみを和らげることに日々苦心していた職員にとって、医療機関での状況は受け入れがたいことが分かる。家族の意向があったとはいえ、自分たちに出来る事を行えなかった悔いは強く、亡くなった利用者に対して「申し訳なかった」と語っている。それでもBさんは、後悔に打ちのめされ立ち止まるのではなく、次に進み、次に活かそうと、思いを新たに進み続けてきている。

日常の大変さや悔いにも負けず進む理由が、

語り 16：突然死とは違う生活の延長線上にある死の看取り方

でも、あくまでもそれは突然死ぬ人に対して思っていることじゃなくて、こうやって看取っている経過があるから言えることなんやと思う。Eさん（健康な利用者）とかが、突然ベッドで死んだはったりとかすると、なんでとかと思うし。それは、Dさん（利用者）はもう突然死する可能性もあるやん、もう60とかで、そういうケースもあるし。あと、Cさん（若い利用者）とかが死んでいたら、もうなんでとか思うし、そこは自分では消化できひんから、あのう、いま、その怖いと思いたくないとは思えへんとは思うねんけど、明らかにKさん（利用者）に対しては、「もういつ逝ってもおかしくないですよ」とドクターに言われているし、そうやって、その瞬間やっぱり、あのう、楽に逝けるように。うん。

語り 17：自然の摂理、人間の定めに対する敬意

あのう、何やったんやろう。何かお疲れさんというのでも変やけども、というふうにしてあげたいなというか。自分らも、すごい何かやる気がなかった、みたいなことでは泣きたくないなというか。身近になった。何か、やっぱりTさんの時は、何か大仰に構えていて、宿直体制は何かとかやってたんです。まあ、それはそれでよかったと思うねんけど。あのう、死ぬことに対して大騒ぎしてたんやけど。そうじゃなくて、一部やん。絶対みんな逝くやんから。逝かない人なんか、まずいない。そうしたら、やっぱりそこっていうのは、そうそう、生まれてくるときの、あの喜びと一緒に、あ、その人が幕を閉じたというところで、やっぱり自分たちのそのやっていたこと。そのとき自分はどこにいたとか。うん。それもあんまり、もう問題じゃないかなというか。そんな自分が、自分というんじゃないで、じゃあ、その人の亡くなり方はどうやったのかというのは、あのう、うん、ちゃんとしたいなというか。誰が看取ってもいいし。安らかな顔で死んでいたら、それでいいかなって、うん。

語り 18：震災後の死を聞き、生活上の死とは何かを考える

あと、災害があって、やっぱり今も帰らんかったりするやん、遺体とか。そう考えたら、こういうところで亡くなって、自分らがその最期を見とけるって、何かすごい幸せなことなんやな私は思っ。Rさんの死。あの、Rさんの死を見たときは、看取った時は、何か、あの、いや、家族に見てもらって、Iさん（Rさんが慕っていた先輩）にも見てもらって、もうRちゃん、なんて幸せというのは、すごい思ったんやけど、その後には災害あったやんか。で、やっぱりそこを自分らが、やっぱり穏やかな遺体を、やっぱり最期まで分かって納めることができるということが、これは幸せやでって思っ。うん。

語り 16～19 で明らかになる。Bさんは看取りに対する姿勢を長期介護の末にある看取りと突然死を区別して語っている（語り 16）。突然死は死との向き合い方が変わり、受け止めることが困難だろうと推察している。医学が発達した現代、健康管理が業務内容となっている施設においては、突然死より中長期の介護の末にある看取りが多くなる。死を迎える瞬間まで、日々を積み重ね、生を全うした存在として、「生まれてくるときの、あの喜びと一緒に、あ、その人が幕を閉じたというところで」、労いの言葉を送ることが出来る死に方であってほしいと、Bさんは願っている（語り 17）。

「逝かない人なんが、まづいない」と、生と死はつながっているものであり、誰もが死を迎える、人間としての定めへの気づきと敬意が込められている。自然の摂理として受け止め、日々を充実させれば、自分が介護していたから、必ず自分が看取らなければいけないことでもない。死に向かって生の瞬間を生きる本人も、その瞬間を精一杯に介護する職員も、思い残すことのないように生きぬき、穏やかな顔で死を迎

え入れることこそが意味のあることだと語っている。死が近い人の看取りを生活の中で取り組んでいくことで、周りの利用者も職員も死が怖いものではなく、当たり前になる自然の摂理として受け止められてほしいと願っている。また、利用者を看取る中で感じたことは、震災による悲しい死のあり様を知り、その思いを強めていることが分かる（語り 18）。様々な死を見聞きし、生と連続するものとして、見通しをもって見送ることが出来ることは、死を迎える方も、それを看取っていく方も幸運であると考えようになったことが語られた。

(6) 施設における看取りの意味

Bさんは看取りをあえて積極的に行っていきたいと考えていると語る（語り 20）。ここで看取らない選択肢とは何か、それが利用者にとって、職員である自分たちにとって、どのような意味を持つのかは分からない。看取ってきた経験や反省から、他の道を探る可能性もあるが、いま、ここで、自分が出来ることをやっていくことの方が、受け身であるより容易であると感じてい

語り 19：看取することは生の延長線であり、怖いことではない

あの、死ぬということに対して、いま、利用者さんに、気持ちとして支えてあげるといのはなかなか難しいことなんやけど。その死に向かっていく、何ていうのかな、元気で突然死ぬというんじゃなくて、明らかに、もうすぐ死は近いよねという人たちのことを日々やっていくということは、ううん、そう難しいことじゃないかなと思うし。死んでいく、何やろう、怖いとかは何かあまり思いたくないし、思っ。ほしくないかな。だって、いつか死ぬんやし、その時に、じゃあ、きちんと出来たかというか。あとは、人間対人間なんやから、どうしても自分が寝ている間に逝くことあるわけやんか。だから、それはそれで、そのときの波長であり、ううん、まあ、その人は一人で逝きたかったんかなって。うん。

語り 20：施設の現状は難しいけれども、積極的に看取りをしていきたい

今は、あえてそれ（看取り）をしていきたいなと思っ。うん、うん。それは、ちょっともう周りの人に言っ。たりもするねんけど。うんと、当たり前やけど、Aさん（先輩）には言うてないけど、まあそんな、いま、（看取ることを考える）まで行っ。てないやろうし、あのね、そんなに言う人もいいひんけど。それは何か、うん、あえてやっていきたいかなというの、いま思っ。ているし。いまはね。やっていけるとこではありたいなと思っ。うん。あと、ほかの選択肢って何と思っ。たりする。ほん。だら、もう積極的に前向きに自分たちがやっていった方が、うん、受け身でいるより楽かなというの、うん。受け身はしんどいやろう。ていうのは、ここ2年間で味。わったから、そこは。でも、そこで、じゃあ具体的にどうかというの、うん。は思っ。てなくて。感覚的にそう思っ。ただけ。

語り 21：生きてきた場所だからこそ看取る意味がある

じゃあ、なんでしないというのを聞きたい。で、やっぱりこう、利用者たちは、ここでやっぱり、こう、人生を歩んでいきたい。そこの仲間に見送られることは、あたしとしてはやっぱり、こう応援する。何か支えていきたいと思うし。もちろん家族が家でやるというのものもあるし。やっぱり家族に対して強い気持ちを抱いている人は、家でやってもらってもいいのかなと思うから、そこは何が何でもここでやるというんじゃないし、うん。だけど、ここで生きてきたということをやっぱり、その、施設やから、施設から抜けられへんとはあるんねんけど、やっぱり人生の基盤として、ここでやっぱり人生を築いてきはったところを、やっぱり自分らもきちんとと言えるようでありたいというのは思っていて、最近。それが、いままではやっぱり自信がなくて、うん。だから、施設だから見れないとかいうことではなくて、やっぱ人間が生きてきた場所として。その、知的障害者の何とかなんとかの施設やから見れないとか、ということではないかなというふうに。ここで人生つくってきはった。ここで歩いてきはったとこだと言えるのではないかなと思う。

ることが分かる。

そして、施設が良いかどうかの議論ではなく、そこで人生を歩んでいるからこそ、仲間に見送られることを応援していきたくて語る。本人と家族が抱く思いに沿いつつ、施設であることを介護と看取りができない理由にしたい。一人ひとりの望む、生きてきた場所での生活の延長線上にある介護と看取りであることを望んでいるのである(語り 21)。災害による死や突然死のように予期せぬ死と異なり、長期介護が必要な場合は、最期について見通しを持った看取りが可能となる。本来、一人ひとりの死は、それまでの生と結びつきを持って、それらを示す場所で、それらを知る者によって弔われるべき事柄である。Bさんが現代における死について、問題提議をしているわけではない。しかし、Bさんの語る言葉のなかには、生と死、つまり生の向こうにある死のあり方についての根源的な考え方がうかがえる。

4. 総合考察

(1) 利用者の変化を受け止められない理由

利用者の変化に戸惑い、対応を切り換えるのが難しかった姿、介護と看取りをしていきたくて考える姿は老人介護施設などとの違いを示している。清水ら(2007)は、老人介護施設での看取りに積極的な職員は職務年数も長く、看取りを複数経験することにより、自信を持つよう

になったことが影響するとしている。それに対して、Bさんが示す介護と看取りの経験は反省と後悔の連続である。それでも立ち止まらず進んでいく。その理由は、障害者施設が介護専門の施設でなく、死に向かっている人がいる一方で、活動的に生を営み暮らしている人がいる場所だからであろう。そして、老人介護施設で看取られる人が、介護を必要とした段階で入所していることに対して、障害者施設は若いころから、その場所で生を営んできた個人の歴史がある。出来なくなる変化に直面した際、出来ていた今までの姿を知るからこそ受け入れがたく、対応を切り替えにくい時期があるのだと考えられる。

利用者と職員間に血縁関係はないが、長年関わっていくなかで、職務上の関係だけでは語れない結びつきが形成されていくと推察される。清水ら(2007)の調査でも、一部の例として長期間ケアをしてきた関係性があるから看取りをしたいと、その理由をあげている。筆者(2010)が職員へのアンケート結果の中で述べ、三原ら(2009)が指摘しているように、利用者との触れ合いが職員に働く意味を与えており、血縁関係に似た近い関係を作らせているのであろう。

(2) 生と死を連続的に考える

知的障害者施設では個人の歴史があるからこそ、生と死をトータルかつ連続的に捉えるようになっていくと考えられる。施設に対する家族

の思いにも触れ、その考えを再確認することになる。施設の中で、その人が生きてきたから、そこに仲間がいるから、看取っていきたいと考えるようになったのである。

昨今の高齢者は最期の場所として、自宅以外の場所で、その8割以上が死を迎えている。個人の歴史において、生と死が断絶された状態で行われているといえよう。医療機関を例に考えた場合、措置が必要な状態での入院となるため、家族を除いて、入院するまでに続けられてきた長い生の営みを知る者は限られる。一人の入院患者であるため、自分の歴史を背景に持つ人物と扱われることは難しくなる。それに対して、知的障害者施設での看取りは、その人を知る者に囲まれ、介護され、それまでの生を振り返り確かめるかのような時間を過ごすことになるのではないだろうか。

Bさんは施設だから出来ないというのではなく、あえて積極的に取り組んでいきたいと考えている。それは、死を生活の延長線上にあるものとして、築いてきた個人の歴史を尊重するまなざしから生まれたものであろう。施設のあり方に関する議論は、様々な取り組みの質的な改善のために必要である。しかし、何より大切なことは、障害の有無に関係なく、人間として生を全うするために、どのような取り組みが必要か、個々人の状況に合わせた柔軟な選択肢が用意されるべきであろう。

(3) 周りにいる利用者へのメッセージ

障害者施設には、活動的に生を営んでいる人もたくさん暮らしていることから、介護や看取りに取り組む職員に対する様々な気づきや表現を見せている。遠慮する、苛立つなど、介護と看取りのプロセスと付き合う中で抱く感情と推察される。それらに即時対応していくことは、日

常の支援において優先されるべき課題であり、取り組み中の職員は申し訳なさを感じている。それでも介護と看取りを続けるのは、誰にも訪れる瞬間を積極的かつ暖かく感じ取り、迎え入れてほしい願いが込められているのである。

(4) 職員間に起こる意見の相違とギャップ

長期の介護と看取りの取り組みは、一職員の思いだけではなく、利用者に対する思いを共有する職員がいたから可能だったといえる。語りの中でも、「自分ら」といった表現がよく使われ、日々の取り組みの中で思いを頻繁に話し合い共有していたことが分かる。複数の職員が支え合う姿勢を持たなければ、介護と看取りには取り組めない。その一方で、他の職員との間で言われた意見の相違に葛藤し、利用者との関係を築く前から介護と看取りに取り組まなければならない若い職員の考え方に苦心していた。取り組みに異議を唱える職員の言葉は客観的かつ現実を踏まえた意見であり、若い職員が私的時間を使いたくないと思うのも当然の要求である。それらを理解しつつも、私的時間を割くことを避けられないのが現状である。ここで、取り組みを困難にする職員間の関係例において改善すべき点は、職員間ではなく制度の不備であることを明確に指摘しておきたい。職員が私的時間を割くことなく、築いてきた関係性を大切に、介護と看取りに取り組めるよう制度の改革が求められる。

5. 今後に向けて

本研究では、職員一人の語りを通して、介護と看取りを考えてきたが、職員の職務年数による違いがあることは先行研究において示されたとおりである。職務年数による考え方の違いと

困難の内容を明らかにする必要がある。

また、看取りの見通しがもてる例だけでなく、突然死のように見通しが持てない例について、経験した職員は何を感じているのかを明らかにしていかなければならない。職務上を超えた関係が形成されているとしたら、突然死は受け入れがたく、職員の感情を揺さぶるものになると考えられる。そのような場合も含めて、職員が心理的な支援を施設内で得ることができ、介護と看取りに関する専門知識の学習機会が保障されるべきである。今後は、看取りのあり方による心理的支援の必要性と具体的な支援策を探る必要性がある。

引用・参考文献

- 1) 上平忠一・竹内美鈴・宮崎まさ江、知的障害者施設におけるターミナルケアについての評価―第35回関東地区知的障害関係施設職員研究大会「長野大会」のアンケート調査からの報告―、長野大学紀要 Vol.24、No.4、pp.501-513、2003
- 2) 佐藤蘭美、ソーシャルワークにおける終末期ケアの意義―介護老人福祉施設及び知的障害者施設職員の終末期ケアに関する意識の比較検討―、現代福祉研究、Vol.9、pp. 51-68、2009
- 3) 清水みどり・柳原清子、特別養護老人ホーム職員の死の看取りに対する意識―介護保険改定直前のN県での調査―、新潟青陵大学紀要、Vol.7、pp.51-62、2007
- 4) 三原博光・松本耕二、知的障害者施設職員の職業意識に関する検証：アンケート調査を通して、障害者問題研究 Vol.37、No.2、pp.68-75、2009
- 5) 張貞京・石野美也子、知的障害者の看取りと死に関する施設職員の意識―A 施設職員のアンケート調査結果から―、京都文教短期大学研究紀要 Vol.50、pp.92-104、2011
- 6) やまだようこ、非構造化インタビューにおける問う技法―質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス、質的心理学研究 Vol.5、No.5、pp.194-216、2006
- 7) やまだようこ編著、質的心理学の方法―語りをきく、新曜社、pp.206-222、2007
- 8) 柳原清子・柄澤清美、介護老人福祉施設職員のターミナルケアに関する意識とそれに関連する要因の分析、新潟青陵大学紀要 Vol.3、pp.223-232、2003
- 9) 保積功一、知的障害者施設の役割と職員の専門性を巡って、社会福祉学部研究紀要、Vol.13、pp.23-33、2008
- 10) 長谷部慶章・中村真理、知的障害施設職員のバーンアウト傾向とその関連要因、特殊教育学研究、Vol.43、No.4、pp.267-277、2005
- 11) 長谷部慶章・中村真理、知的障害者関係施設職員の利用者に対する不適切な関わり―職場ストレスとスーパービジョンからの検討―、障害者問題研究、Vol.34、No.1、pp.73-79、2006
- 12) 高橋菜穂子、行政・教育機関との連携における児童養護施設職員の語り―自らの役割についての意味づけと実践上の葛藤―、京都大学大学院教育学研究科紀要、Vol.58、pp.369-381、2012
- 13) 高橋菜穂子、ある児童養護施設職員の語りのKJ法による分析―テキストの重層化プロセスからとらえる実践へのまなざし―、京都大学大学院教育学研究科紀要、Vol.57、pp.393-405、2011

